大映カラーは何故世界一？

「千姫」は話題も絢爛

愈々吉田御殿の撮影に入る

大映京都が世界最高の技術をかけて総力撮影中の総天然色大作「千姫」（一本村長治監督、京マチ子、市川雷蔵、大河内傳次郎、吉川家威、時手子、恵美太郎、東山千栄子主演）は、話題を沸かせつゝ、最終キャメラは愈々吉田御殿に突入、遠目近目スチリッシュ吉田御殿・大書院に、桜樹の撮影をつゞけている。

「千姫」のセットを覗けば、誰でもすぐ感じることは、小道具の調度の美・しさだ、いや草花も盆栽に限らず、襖絵、柱の金具にも、あらゆるものが金色キンランとして、實に美しい。

セットの関係、ライトもあざやかられているが、いざ本番となって、各ライトが点やされると、正面もまばゆいばかりである。そのまばゆい中に、脇息にもたれて絵金の絵とうの行燈けを見た京マチ子の手鞠が坐っている。

「なるほど、これが絵金の絵なのか」

「早く映画が見たいわねえ」

と感歎につゞかれた若い女の子達の間から溜息が洩れる。

實際、此の美しさが、そのまゝスクリーンに再現されるとしたら、何と素晴らしいことだろう。

大映で採用している色彩システムは、イーストマン・カラーだが、必ずしもイーストマン・カラーだからと云って、必ず美しく撮れるとは限っていない。その撮影には、先端、撮来した宮川一夫キャメラマンは、あちこて撮影中のイーストマンのラブシ型を各撮影所で見て来たそうだが、少しも良くないので失望して来たという。いくら優秀なフイルムでも、それを使用するのは人間である。技術が下手なら、いくらフイルムがよくても、いい色彩が出てこないのは勿論である。イーストマン・カラーは全世界に普及し、日本でも東宝、新東宝に引ゞ日下部中だが、これが公開された暁には、始めて、大映の色彩技術の優秀さが誰にもハッキリと判ることだろう。大映が今回イーストマン・カラーの呼称をやめ新に「大映カラー」と呼ぶことになったのも、その為で、色彩映画の本命とされた「総天然色」の驚異的な色彩も、大映の優秀な技術あればこそ初めて到達し得た境地なのである。

日本橋・銀座三ノ十　全国劇場総元会社内　サイレーター社内　電話　（八八六・三三四八・三三三一・九二一四）

「千姫」覚え書

黒髪のあもいは乱れて、
その美しき雪の肌に、
恋のほのおが燃えゝる——
奇しき運命ゆえに結ばれん
として結ばれぬ千姫と
若武者の悲恋が、
絢爛の色彩美に
つゞられてゆく！

大映カラー・総天然色映画

千姫

色彩映画の革命成るもと、全世界が賞讃した大映カラーで描く絢爛華麗の悲恋絵巻！

数奇な運命にもてあそばれ、ひたすら女のしあわせを求める白妙の肌、まことの恋にのみ、生きるのぞみをかけた千姫であったが……

★スタッフ★

★キャスト★

俳人を語る　木村蕉雄・監修

★ものがたり★

豪華な千姫のお輿入れ荷物
「千姫」で小道具を全部新調